

利根川進 著

『私の脳科学講義』

(岩波新書)

[491 T9 1]

知識もなく、わけもわからな

いのに、生物学的な事象に些か興味があります。英語の授業をしていると、お姫様と巨大な怪獣が出てくる童話から、ケクレによるベンゼンの環状構造式やニュートンの光スペクトル分析に至るまで、様々な話題に遭遇します。

十数年前、記憶の仕組みと題する英文に出会ったのですが、実際には高校の生物で学習する認識のメカニズムが紹介されているだけでした。では記憶の生物学的な位置づけはどうなっているのだろうと思ひ手にとったのがこの本でした。あまり専門的な本では歯が立たないので、新書なら少しは理解できるのではないかと思ったのです。ご存知ノール生理学医学賞を受賞した利根川進博士のエッセイというか、講演の原稿や対談などに加筆したアンソロジーのような本でした。

結局、この本で分かったのは、

記憶についての研究が緒についたばかりなのだということでした。私は文系の人間ですので、精神と肉体の二元論にも与らず、靈魂転説も満更ではないと思う反面、思考や感情ですら単なる生化学的な反応にすぎないという超唯物論的な考え方に少なからず興味があります。

とも



あれ、理系の人間にとつては、研究者として

の半生が自伝的に綴られていて示唆に富むものがありますし、文系の人間にも最先端の科学を垣間見る機会を与えてくれる本だと思ひます。

川村元氣 著

『世界から猫が消えたなら』

(マガジンハウス)

この本、タイトルからは想像できないような内容です。余命わずかと宣告され、放心状態になつてゐる主人公。そこに派手な変な悪魔が現れる。その悪魔

に「この世界から一つだけなにかを消す。その代わりにあなたは一日の命を得ることができると」いう話をされ、悪魔に唆されながら、一つ、また一つとこの世界から消していき、生き永らえていく……? というような始まりです。2〜3時間で読破できる程度の量ですし、硬くない文体で読み易くユーモアもあるので、読書があまり好きでない人も、読み始めたが最後、終わりが気になる本だと思います。表面的に軽く読むだけでも楽しめると思ひますし、深く考えようと思ひますし、どこまでも考えさせられる内容になつて

います。著者である川村元氣氏はプロデューサーとして、電車男、モテキ、おおかみこどもの雨と雪、などを制作した方です。ちなみに、私は本をほとんど読まずに生きてきました。果敢にチャレンジしたこともありませんが、読破せずに終わりました。結局、「本を買って読む」言い換えると「お金を払ってまでして、他人が考えた作り話を読む」行為が無駄に思ひました。しかし、この本は違ひました。この本は違ひたのです。私が読破したのでした。

NHK「東海村臨界事故」取材班 著

『朽ちていった命』

(新潮文庫)

とにかく忙しいと思ひ込んでゐる。毎日変わり映えないルーティンを慌ただしくこなす生活が常態化してゐる。こんな生活を何年続けているのだろう。情報があふれる今の時代、衝撃的なニュースが報じられてもあまり驚きを感じなくなつた。ルーティンに組み込まれてゐるからか、自分の感性が鈍くなつてゐるのか、忙しさにかまけてゐるのか。とにかく、いつの間にか理解したつもりになつて終わつたことにしてゐる。

読書案内

もう耳慣れた東京電力福島原発事故。確かに衝撃的だった。しかしそれ以前の1999年茨城県東海村核燃料加工施設で臨界事故という重大な核の事故が起きてゐた。この事故で大量の放射線を浴びた一人の治療経過が克明に記されたのが本書である。病院に運ばれた当初は、意

識もすっかりしてゐて、とても重症には見えなかつた患者が、想像を絶するスピードで悪化していく。あらゆる手を尽くしてもみるみる朽ちていく患者を前に、挫折感に打ちのめされる医療スタッフの苦悩も、克明に描かれてゐる。生命の設計図である染色体が無残に破壊されることによって、人体に起きる異変、現代の医学の最先端をもつても、何もできない人間の無力さと不遜さを突きつけられる。原子力を甘く見た、ずさんな作業工程が事故の直接的な原因だとしても、本書が問いかけるものは、制御できないものの恐ろしさ、人間の驕りや無力さなど、とても深く重い。

フクシマも無意識に終わったことにしてゐないか。忙しさを言い訳に、わかつたつもりで、思考停止してゐる……そんな自分の本質を問われてゐるようではつとさせられた。



『16歳の教科書』

(講談社)
[002 S2 1]

三浦しをん 著

『舟を編む』

(光文社)
[913 M80 5]

北野高校の進路室に来て八年。進路に関する色々な相談のつてきた。春を迎えて又、皆さんが自分の未来について考え始める頃…。そのヒントになる？本を紹介しようと思う。

『16歳の教科書』は七人の著名人が「なぜ学び、なにを学ぶのか」を教えてくれる本。「数学力とは真実を見抜く力」と言う計算力の達人、「理系のやわらかアタマを作ろう」と言う科学作家など、豪華特別講師が、学ぶ楽しさを教えてくれる。私も16歳の時に読めば、もっと勉強が好きになったかも…。(〇十歳遅い！)

『舟を編む』は「あまちゃん」でも有名な松田龍平の主演で映画化され、話題になった一冊。辞書を作る、という一般人にはあまり縁のない仕事で、こんなに熱い営みだったなんて…。主人公たちの言葉に関する細かいこだわり、仕事への愛情が伝わ

つてきて、辞書を読むのが楽しくなるはず。「お仕事小説の名手」と言われる三浦しをんには、林業を描いた『神去なあなあ日常』や文楽の大夫を目指す青年を描いた『仏果を得ず』等もある。林業や文楽の世界に関わりたくなること受け合いの楽しい小説だ。仕事とは、単に生活の手段であるだけでなく、新しい自分を発見し実現させてくれるもの、とよく言われる。皆さんがどんな仕事を通じてより素敵な自分を実現し、新しい世界を築いてくれるのか、楽しみにしている。

読書案内

田辺聖子 著
『新源氏物語』

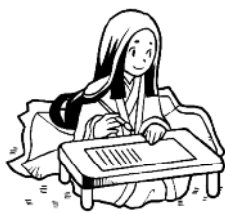
(新潮社)

先日、堺市立文化館の与謝野晶子文芸館に行ってきました。そこで行われていた特別展「源氏物語に魅了された女たち」を見てみたいと思ったからなんです。どうしてそんな特別展に興味を持ったのかって？ うー

ん、それはすこし時間を遡って…いやいやずいぶんかな……。

小さいころから読書は好きで、昆虫図鑑に始まりグリム童話など様々な本を読んできた私ですが、そのわりにはどうも国語は苦手で、特に古典は大嫌い！でした。それは「ありおりはべりいまそかり」なんてわけのわからない法則と言葉の変身に理解不可能だったから。そんな私も高校生時代がありまして、図書館の司書の先生と仲良しになり、その先生に勧められ読んだのがこの本でした。

本の題名を見たとき「古典嫌いやから、読めへん！」と言った私に先生は「まあ、読んでみよ」とえらく勧められたので「しやあないなあ、じゃあ読んでみるわ」としぶしぶ借りて帰ったのです。



まずページを開けてみると「古典な文ではなくて読めそうな文やうん」と嬉しくなり、内容は言うのととても趣のある恋愛小説って感じで、あつと言う間に5巻とも読んでしまいました。こんな出会いがあったって特別展に興味を持ったので

す。

特別展では解説文や展示物を見ながら、翻訳の域を越えた「源氏物語」への作家の想いに触れる事が出来ました。ちょっと気分転換にいつもと違う分野の本を読むのもいいですね、新しい出会いの機会が増えるかも。

高校時代にこの本と出会って幾年月、今でも色々な出会いをさせてくれるこの本と出会わせてくれた先生に感謝！！

和田 竜 著
『のぼうの城』

(小学館)
[913 W7 1]

奈良からの通勤時間が、読書タイムになっている。一時間強の電車通勤は大変かなと思っていたが、案外有意義だ。

最近、本校図書館で借りたのがこの本。数年前に映画化されたが、観ていない。映画を観るまじった時間がなかなか取れないので、その意味でも本は使い勝手が良いように思う。『ALWAYS三丁目の夕日64』も本で読んだが、電車で思わず泣

きそうになった。

さて、今年の大河ドラマが『黒田官兵衛』で、官兵衛は様々な戦略を立てた事で有名だが、その中でも高松城の水攻めは圧巻。この本は、その水攻めを石田三成が埼玉県にあった忍城(おしじょう)に対して行い、二万の軍勢で兵数五百の城に襲いかかったにも関わらず、ついには落城させる事が出来なかったという歴史小説。歴史小説は教科書よりも頭に入る。この戦も様々な因果関係から起きており、時代の流れや勢力図がよく分かる。もちろん小説としても面白く、城主の成田長親が、二万の軍勢、そして日本史上最大級の水攻めからどのようにして城を守ったのか。読んでのお楽しみ。

その他に、ここ最近読んだ本の中で抜群に良かったのは、〇先生も夏の図書館報で紹介していた『永遠の0』。すぐに映画化されてしまったが、これだけは時間を作って映画も観に行きたい。また、語源やルーツを探究の好きな人には、『大阪「地理・地名・地図」の謎』もおすすめ。『十三』という地名のルーツ、「じゅうそう」という読み方のルーツも知る事が出来る。